

<山室軍平のメッセージ「母の愛」>

私は山陽・山陰の境目に近い岡山県の山の中で生れた者であります。私の父は水呑百姓で、父と母との間に八人の子が生まれました。水呑百姓の貧しい家庭に八番目の男の子が生まれたので、父も母も共にこれを喜びました。しかしながら、いかにしてこの子供を育て、また教育するかということについては、全く先が見えません。それゆえ、ことに私の母は非常にこの事を心配しまして、色々考えたけれども、別段よい分別の出ようはずもなく、そこで一心に神信心を始めました。

それは何という神様を拝んだのだか、私にもよくわかりませんが、私の知っている事は、母が朝な夕なに額づいて神を拝み、どうかこの赤ん坊が無事で成人しますよう、成人の後は、あまり人様にご迷惑をかけないで、何かよいことをする者となりますようにと念じたことあります。

かくする中にまた母が考えました事は、こうした事をいくら口ばかり願うたとて、その願いが真心から出ている事を神様に見届けられないならば、無駄であろうと、こう考えました。それでは、どうしたならば、自分の願いが真心から出ている事を、神様に見届けられるであろうか？ いろいろ工夫したのであります。

前に申し上げるように、私の郷里はいかにもひどい山の中で、海から二十五里もございまして、格別に道路がよろしくないため、近頃はだいぶ変わりましたが、以前はかなり広い川の渡しを五遍も渡らなければ、家へ帰ることができなかつたのであります。それほどに交通不便な所でありますから、海の魚というものは全く来ない。また牛肉でも牛でもというものは、その当時私の生まれた地方でいただく者は、一人もなかつたのであります。そこでもし何かごちそうとか、また滋養物とかいうものがあつたとすれば、新鮮な野菜物を除いては、ただ鶏の卵のほかはなかつたのであります。

それゆえ、私の母はその地方で得られる一番の滋養物、また一番のごちそうである卵を食べないことにして、神様を念じたならば、あるいは神様がそれを、その祈りの真心から出たしるしであると認められるであろう。そのように考えましたから、そこで一生涯の卵断ちという事を思いだつたのであります。

爾来、朝な夕なに両手を合わせ、神の前に額づいて、母は祈念を込めました。「どうかこの赤ん坊が無事で育ちますよう、また成人の後はあまり人様にご迷惑をかけないで、何かよい事をする者となりますように真心から祈つたしるしに、私は一生涯卵を食べません」というのであります。何しろ私が八番目の末子でありますから、母が私を生み落とした時にはすでに41歳に達しておりました。それから数え年の七十歳で死ぬるまで、足掛け三十五年間、まえ申すようにその地方で唯一の滋養物、また唯一のごちそうとも言うべき卵をただ一つも頂かないで、拝みに拝んで死んでくれたのであります。

私は家が貧しい事や、その他の理由で、数え年九歳の時から父母のもとを離れて叔父のもとに育てられ、のち十五歳の時に東京に出て、今日まで独立でやっております。その間京都

あたりで労働しながら苦学している時など、夏休みに郷里に帰ってみると、母は貧苦にやつれたのでもありましょうが、よそのおっかさんたちよりは、年の取り方が早いように見えました。

私は母を気の毒に思い、「おっかさん、あなたの願いはもう神様に届いております。私もせいぜい奮発しますから、私の事は安心して、今からのち、卵でも魚でも、食べられるときは食べ、体を大事にし、私どもの末を見届けていただきたいものであります」と、何度も言いましたが、母が頑として応じません。

「そういう理屈も言えるか知らないが、それでは神様に対する私の真心がとおらないから、私はいったん約束したことは最後まで守ります。ただ私の願いは、おまえがよい人になって、よい事をするようにという、ただこれだけであります」と言うて、とうとう前申し上げたように、三十年の間、その約束を守り通してくれたのであります。

私は今にして、しみじみ母の事を考えます。そうして、かかるありがたい母をあたえてくれた神様までが、ありがたいと感ずるのであります。

私はこれまでいろいろ書物も読み、また人様のお話も聞いてみましたが、それらすべてに勝りて、慈愛の神様がこの世にいますに違いないという、何よりの証拠は私の母であります。すなわち母の愛であります。

私はこうしたありがたい母をくれた神様は、その母を幾万倍した愛の神様でなくてはならない、というのが私にとって、何より確実な有神論の根拠であります。

諸君、母は誠にありがたいものであります。そのありがたい母を私どもにくれた神様は、さらにそれよりもありがたい御方であります。